

會



報

1950年9月

151

日本山岳會

秩父宮殿下

本會名譽會員に

去る四月十九日の役員總會席上名譽會員を推薦決定した際、秩父宮殿下をも推薦申し上げたのであるが、殿下の御意向を伺つてから發表するのが順序と考へ、その機會を待つて居つた。この程評議員の一人が御殿場の御山莊に參上、本會の意思を申し上げたところ、殿下から御快諾いただいたので、茲に正式に、秩父宮殿下が本會名譽會員になられたことを發表する次第である。

秩父宮殿下の御登山

横 有 恒

過日、藤島評議員より若い會員に對し、殿下の御登山に就いて何か書くやうにとのことであつた。殿下を名譽會員にお迎へしたことは本會にとつて、此上なき名譽と光彩と悦びとを加へたことと思ふ。それだけに今此處に殿下の登山御經歷を語る私にとつては、餘りに荷が重過ぎるのである。私には手許に全く資料を缺く現在、何うかして正確な資料を得たいと焦慮した。しかしそれも充たしかねてゐる。洵に申譯のないことと思ふ。

殿下の山岳への御關心は大正十一年前後、赤倉細川侯別荘のスキーの頃に始まるやうに記憶する。その後毎年、冬はスキーに―それは必ず登山であつた―夏は山に向はれた。勝れたる御健康と闊達なる御氣性との殿下は果敢大膽なる若

き登山者として熱情を山岳へ寄せられたのであつた。

スキーによる御登山は、赤倉より初まり、次に五色を中心に繰り反へされたが公務の間、二三日の休暇を利用して精一杯の強行であるのが常であつた。雪の山への御足跡は次第にのびて、赤城より東北へ、そして北海道に達せられた。札幌近郊、定山溪奥に建てられた登山スキー用の小屋は今日も尙登山者に多大の便宜を與へつゝある。大正十三年五月には立山に御登山になり翌年の冬は瑞西ユングフラウに登られアレッチ氷河をコンコルディアに至るスキー行を樂しんでをられる。

夏の山としては、大正十一年燕より槍への縦走に始まり、同十五年八月瑞西に於ける御登山を以て華々しい御經歷を飾るものといへよう。瑞西に二大登山中心地があるが、その一はグリーンデルヴァルトであつて、ベルナーオーバーランドの峻峯を控へてゐる。他の一はツエルマツトであつて、ヴァリサールペン山の峻峯を控へてゐるのである。この二つの中心地を據點として、殆ど休憩の日も無く峻峯懸崖、氷河の大殿堂を心行くばかりに登られたのであつた。御登攀の山々は、ベルナーオーバーランドでは、ヴェッターホルン・フィンスターアールホルン・シュレックホルン(アンデルソンズグラトを含む)・エンゲルホルン等々ヴァリサールペンでは、マッターホルン(瑞西側よりイタリヤ側へのトラヴァース)・ツイナルロートホルン・モントローザ・リスカム等々。

一夏にこれだけの峻峯を登り盡

されたことは、好天候に恵れたことといへ、實に驚嘆すべき立派なる御業績と申さねばならない。

即ちこの登山者としての豊かなる御天分を餘すところなく發揮せられた機會を以て、英國山岳會は殿下を名譽會員に推薦したのであつた。英國山岳會は會員たる資格の嚴選を以て知られてゐるのであるが、このことは名譽會員の推薦に當つても同様と見えて、ウエストン師が私に「英國山岳會は儀禮的な會員推薦をすることは決してない。そのため自國の皇族にして一人もこの榮譽を受けられたものはないのである」と語つた。同會の名譽會員たる皇族王族は曩にベルギーのアルプルチット、ローマ法皇ピオ十一世あるのみである。

御歸朝後は昭和二年夏、西懸高より槍への縦走を経て小槍に御登攀、笠を過ぎて高山への御登山が主たるものであると思ふ。

殿下のこの多年に亘る御活動はわが國登山界に光輝ある強き力として、積極的な影響と感動とを斷えず與へられつゝあることは爰に贅言を要しない。

今や殿下には御殿場の山莊に朝夕、富士を友として御静養中であるが御回復の速かならんことを祈念して已まないものである。

大島亮吉君の事(一)

成 瀬 岩 雄

「本書は一九一四年、クリスマスの日、ジョージ・ステイブンス氏より贈られたるものにして、元來本書はエドワード・ウィンパー自身より彼が贈られたるもの……」

如何にも「先蹤者」の著者を喜ばしきやうなこの短い一文は、一九二七年拾月、かねて英國に注文してあつたウィンパーの「シャモニー・エンド・モンブラン」が届いて扉を開いた時、先づ眼についた所有者の藏書票の傍に記されてある記念文であつた。

「エドワード・ウィンパー自身の贈り物」つて云ふ様なサインでもありや、國寶物だけだなんて残念がつたり喜んだりして暫らく二人で眺めてゐた。ウィンパーなんて我々にとってはまるで懸離れた遠い世界に存在する、云はゞ登山家の中でも神様みたいに思つてゐたけど、之を手にした時はウィンパー自身の手からでも貰つた様な氣になつて、二人共いたく喜んだものだ。

當時彼とよく相談しては山の本を注文してゐたが、引受けてくれるロンドンの本屋も、長い時には一年位距つて忘れた頃になつて送つて来る事もあつた。そして來ると直ぐ、何か所有者の面白いサインでもありやしないかと、扉を開いて見るのが又楽しいもの一つであつたので、偶々このウィンパーの本はさすがに二人を喜ばせた。

唯残念に思ふのはアルバインジャーナルのコンプリートセットが届いた時幾何もなくして彼は懸高に行つてしまつたのだ。自分が正金銀行に爲替を組みに行つた翌日彼は懸高で亡くなつてしまつたのだ。之から愈々このアルバインジャーナルの積み重ねられた中に居て、彼が「先蹤者」の原稿を更めて念入りに筆を入れやうとしてゐたのだ。

實際考へて見ればあの當時の未

だ文献材料の少ない時に、よくもあれだけのものを纏め上げたものだ、つくづく此頃になつて感心してゐるのである。今にして見れば山の原書も澤山来てゐる事だし、實際のアルプス登山の経験者も澤山ある事だから、多少は樂に『先蹤者』も出来るかも知れないが、今から考へりや材料の少ない爲め無駄な努力もしてゐたかも知れないけど、それだけ一面、彼の知識も擴まつてゐたに違ひない。

當時彼が斯んな苦心をしてみた事があつた。マンメリの事を書いてゐる時、エー・エフ・マンメリのエー・エフ・が判らなくて頻りと文献を漁つてゐた。後にアルバインクラブ・レヂスターの第三巻が手に入つてエー・エフ・もアルバート・フレデリックである事が判り大變な喜びであつた。

又アルバインクラブの歴代の會長の名前を、我々が昔中學生の頃歴代天皇の御名を暗記させられた如く書き連ねて喜んだ事もあつたが、日本で云へば山岳會の會員名簿みたいなのが後になつて手に入つた時は、なんだ此處に出てよ、なんて嘆いたものだが、當時としてはレヂスターの一頁一頁を繰つては探し出して楽しんでゐただから話にならない。其處へ行くと當時の存命中の人物、例へばクリリッジの如きは彼としても書き易かつた様だ。『先蹤者』にも出てゐる通り横さんがクリリッジの家を訪ねられる場面が出てゐるけど、彼としてはこの話を横さんから伺つた時は恐らく耳をそば立て、眼を輝かした事だらう。曾て自分が横さんから、アルバインクラブのアニエアルディナーの席で

マロリーの隣席に坐り色々話をされたと云ふ事を伺つて、思はず胸の高鳴りを覺えたものだ。我々凡人の如き者でさえ斯んな話を聞くに堪らなくなるものだが、まして『先蹤者』の著者ともなれば尙更緊張と喜びに燃えた事であらう。

それに彼が穂高に出掛ける鳥渡以前に、松方三郎さんがロンドンから歸つて来たばかりであつたからユックリと語り合ふ機会を待つてゐた事だらうと思ふ。と云ふのは彼が曾て「松方がグレボンに登つたさうだよ」と語つた事があつた。彼にして見れば當時心酔してゐたマンメリのあの有名な「グレボン」を讀んで感激してゐた矢先だつたのだから、曾ての同僚松方氏がグレボンに登つたのだから彼な位に思つたのだらう。そんな顔付で自分に語つた事があつた。彼としては松方氏からそんな話も聞きたかつたであらう。

そして穂高から歸つてからは母校に教鞭を取る事となり、將來は山岳文學の講義をやると思ふ事を自分に語つた時、思はず微笑まざるを得なかつたのは彼が以前聞いてゐたエミール・ジャヴェルがヴヅエ大學の助教授時代の事

「丁度其れは彼の教へる學生が教室の窓から街通りの向側の住宅に毎日顔を現はす若い其の家の娘の美しい、生き生きとした顔にちつと見とれて教科書をそつちのけにして居たのと全く同じ様に、ヴヅエ大學のブレイ・プロフェッサーたる此のエミール・ジャヴェルは、其の時分、レマンの水光の彼方に聳え見ゆる彼のダン・デュ・ミディの七つの頂峯の美しい山

姿を窓越しに見つめて居ては、好く彼の生徒の前に居る事を忘れたのであつた。其の時彼は其の窓から彼の友達を見たのだ。山は彼に合圖をしたかも知れぬ。又山は彼に言葉を掛けたかも知れぬ。『先蹤者』三八二頁参照）

彼大島さんは學生に對しては恐らく嚴格であつたらう。妥協を許さなかつたやう。併し彼にも亦ジャヴェルの如きキースがあつたらう、彼自身の一節を思ひ出したから講義したであらう、と思はず微笑まざるを得なかつたのである

彼の死以來二十五年忌も近い事だが、彼が生きてゐたら恐らく『先蹤者』の第二巻、第三巻が出来上つてゐた事は疑ふ餘地の無い事である。彼が晩年心酔してゐたマンメリの好き仲間であつたノルマン・コリーとかセシル・スリンドンスピーとか其他鮮々たる御仁等、未だ彼が筆を執つてゐなかつたのは澤山あるのだから。

或は彼は過去に於て軍籍にあつた経験から、恐らく此度の競争に引張り出されてゐたかも知れないけど、引張り出されてゐない事を思ひ合すれば、曾ては彼が積雪期に於けるレコードを残した穂高の岩壁に圍まれた水雪に、假令二ヶ月の間でも安らかに眠つたと云ふ事は今にして見れば彼に取つては誠に彼らしい最期であつたと思ふ

それは彼が晩年餘りを入れてゐたマンメリの最期に於てゐるに似てゐるのではないか。生前彼が自分の處から持つて行つたノルマン・コリーの「クライミング・オン・ザ

・ヒマラヤ・エンド・アザール・マウンテン・レンヂス」の第八章の最後の拾數行に彼自ら判然と施したアンダーライン。それを彼自らやつてしまつたのだから。その譯は『先蹤者』「マンメリ」の四百八拾壹頁に載つてゐるけど敢えて此處に再録させて貰ひ度いのである。

「ヘースティングズと予は直ちに、此の高き水河に搜索を試みる事の、全く問題外である事を認めた。予等は舊き上部のキャンプ迄水河を約半途登つた。其處には残し置いた食糧は手も附けられずに在つた。而して其處へ登る迄さへ積雪は一呎も深かつた。結局予等は重き粉雪の中を、五〇〇呎も登つて巖谷の南側に達して、マンメリとラゴビルとゴーマン・シングが埋もれてゐる水河に最後の一瞥を得んとした。ナンガ・バルバットの山側よりは、雪崩は雷霆の如くに、空中に雪粉を振り飛ばして、轟き落ちて居た。此の冷たき、親しみ無き、白雪皚々たる大山岳の深奥に突入すると云ふ事は不可能と言ふより他には、言ふ可く何物も無いのである。山々は渺なく共予等に確たる聲を以て「去れ」と言ふ如くである。徐ろに予等は下つた。而して最後に、其の何處に可吾等の友の葬られある、此の偉大なる山岳と白雪との雪とを顧望したのであつた。

假令マンメリ最早予等と共に無き事は憤ひ能はずとは云へ、又最早彼は予等を、風雪に削磨し瘠せし、露はなる岩の面や、山稜の僅か急峻なる足場や、急谷の張り出でし水面に、嬉々として悦

びつゝ先導する事能はずとも、而も彼に就ての記憶は消えぬであらう。彼こそは忘れられぬであらう。峻厳冷情なる山岳は彼を犠牲として要求した。而して今や偉大なる山々の雪厚き水河の中に彼は安らふ。『風の作つた雪庇の曲線と、割れ裂けし雪の繊細なる迂曲』とが、唯だ彼を蔽ふて居る。陰鬱なる斷崖と測り知れぬ空間に落ちて居る偉大なる褐色の岩壁と、而して彼のあの如くに愛せし雪峰とが、唯だ彼の横はつて居る其場所を守つてゐる。」

（以下次號）

本年度の會費未納の方は至急御納入下さい

- ★年額 三〇〇圓
 - （基本年額一五〇 山岳一五〇）
 - ★東京支部は五〇〇圓
 - （基本年額一五〇 山岳一五〇）
 - 圖書室維持費一〇〇 支部費一〇〇）
- 會費は會の活動と發展の源泉であります。最近の會の財政は決して樂觀を許さない状況故、未納の方は至急御納入下さる様特別にお願ひ致します。

★ヒマラヤン・ニュース★

去る六月三日フランス・ヒマラヤ遠征隊はネパール・ヒマラヤの巨峰アンナプルナ（別名モルシャデイ）（八〇七八米）の登頂に成功した。これは初めて征頂された八千米級でもあり、カリ・ガンダキ河の流域から一氣に五三〇〇米も屹立してゐるこの山の初登攀は、ヒマラヤ登山史上に不滅の光芒を放つものと云へやう。



外國で出版された

山の書物

田邊主計

イギリスの本を、制限はあつたが、取りよせられるやうになつてから一年餘になる。其後フランスからも買入るやうになつた。新刊書のカタログも来てゐるし、本屋では、これらの本を並べて見せたりした。求めたい本も時々あるが思ふやうにならない。また國としても今は極力節約をしなければならぬ時である。ポンドは昨年九月に切下げられて一〇〇八圓であり、フランも引下げられた。十二・五六の金は諸掛りを入れて六百五十圓位ではないかと思ふから日本の書物のねだんの事を考へるとさう高いとは思はぬ場合がある。戦前、最後にイギリスから求めた書物は一九三九年のはじめあたりに出たもの位と思ふ。前金の支拂つてあつた雑誌などは一九四〇年の終りか四一年のはじめ頃までは来た。英獨開戦してから一年半位になる。その四一年の十二月にはアメリカと戦争になつたが、そのつと前から外國へ送金する事もわれは出来なくなつてゐた。四〇年頃から勘定して大體十年近く、私は井戸の中の蛙となつたが

いま井戸の底から少しはひ上つて来た感じである。
 タイムズのリテラリー・サブルメントや毎月出るブックス・トウ・カム等に出てる山に關する新刊書を次に書き出して見た。人にきいたり他の資料にも據りつゝ、また、書きたいと思つてゐる。

- Two Mountains and a River — H.W. Fritman C.U.P. 12/6
 - The Ascent of Nanda Devi Mount Everest, 1938 を著したテイレルンの新著。中央アジアで登山や旅行について。寫眞三十七枚。
 - Climbs of my Youth — Andre Roch, Lindsay Drummond 12/6
 - グリーンランドやガールワールへの遠征隊をひきいたスイツアラマンの最も優れた登山家の一人である Roch の著書である。年少の頃のこと。一九二〇年、三〇年の彼が最もアルプスに活躍した頃のことを書いてゐる。スブレンドンレイ・イライストレイテッド・ゾオリウムと紹介にある。
 - Burma's Tey mountains — E. Kingdon-Ward, Jonathan Cape 12/6
- 今度の戦争前にビルマ最北部で行つた二つの旅行記からなる。一つは孤獨な、缺乏に耐へた旅行であり他はアメリカの博物館の爲めにアメリカの連中と共に行つた用意も豊富なもので兩者の對照は面白いと評にあつた。會報四九號はこの著者の「チベットに於ける植物採集旅行家」のことを書いてきたがこの書の中でも新しい蘭の花を見付けて息の根も止まる程興奮する所なんかがあるやうである。

- Mountains in Colour — E.S. Snythe, Parrish 25/—
- アメリカ人の著者の「The Valley of Flowers」が出つてゐる。
- Travel Amongst the Great Andes — Edward Whympere John Lehman 8/6
- なくなしたエドワード・ホース・スライスが序文をひいてこの古典を特後後の讀者の爲めにモリットした。このスライスは「エドワード・ウインマン」といふ本を著してゐる。
- Swiss Life and Landscape — Emilie Egli, Paul Elek 12/6
- 山の書物ではないが、スイツアラマンの地形と風景の中に適應してゐるその住民の生活について述べたもので、九十四枚の美しい寫眞が入つてゐると書いてある。
- A New Map of the Karakoram, 1940 John Murray 7/6
- ロイヤル・シオグラフィカル・ソサエティから戦前に出たもの。當時取寄せられなかつたので、最近、丸善へ頼んでみたが、取れるかどうか、はつきりしない由。
- Song of the High Hills — Charles Gos, George Allen & Unwin 9/6
- このトラジック・ロマンスはツエルマットの村の上に聳える山々を背景としてゐる。フランス語からマルコム・ビアネスが英譯したもの。ゴオの「萬年雪と氷河のほとり」は人々の愛讀書の中に加へられる書物の一つであるが、藤島敏男氏がその一部を譯して「會報」に出したことがある。
- The Early Alpine Guides — Ronald Clark Phoenix House 15/—

- スウィツアラマンの登山黄金時代のハイオニア・ガイドたちのことを書く。ポオトレイト、地圖等三十二頁。各ガイドの傳記及主要登攀記録のアンディクスがついてゐる。
- A History of Mountaineering — Claire-Eliane Engel, George Allen & Unwin 21/—
- アンシエールは、山の本をいくつか著してゐる。一九三六年に出た「コラヤへの挑戦」は譯書がある。
- The Complete Ski Manual — Eddie Huber & Norman Rogers, George Allen & Unwin 12/6
- When Men and Mountain meet, H.W. Fritman, C.U.P. — 1946, 54 photos & 6 maps, 15/—

●木暮前會長の讚碑建設●

今般石楠花山岳會・霧の旅會に於て故木暮理太郎氏の讚碑建設を企てられた。木暮さんて本邦登山界に造された業績については今更喋々の遺もなく、讚碑完成の晩は本會に寄贈され永久に保存保管を托される次第であるから、會員各位に於かれても應分の御寄付を賜りたいと存じます。

建設計畫概要

様式 青銅版に故人の上半身浮彫
 製作者 會員 佐藤久一郎氏
 建立場所 奥秩父増富村金山
 經費 金五萬圓
 藤金 會員並贊同者(最低百圓)
 申込先 本會事務所で取次ぎます
 實行委員長 小野幸、副委員長 神谷恭 以上

桑原武夫著 B6約一八〇圓
 九月下旬刊

登山の文化史

アルピニズムは近代の所産である。ギリシヤの若人も登山は知らなかつた。本書は登山行為への、嘗て試みられた事のない文化史的考察である。之を繙く裡に山への郷愁は又新たな炎を吾々の胸奥に點する事であらう。著者は著名な佛文學者であるが、その山歴を物語る興味深き諸記録を併せ収めて居る。

B6約一八〇圓
 九月下旬刊

山と探検

著者は山岳界に京都の一王國を築き上げた先覺であり、その異色ある登山行為は一つの風格をさへ具へた感がある。その後大陸に渡り胡砂吹く奥地に探検を重ねる事数回、學界への貢献も甚大に。本書はその名著「山岳省察」以後の貴重な諸記録の集成である。

恒 有 著	山 行	¥ 230	〒 30	
松方三郎 著	アルプスと人	¥ 220	〒 24	
小島烏水 著	山の風流使者	¥ 250	〒 30	

東京千代田區神田
 小川町3の24 岡 書 院 振替 東京
 9 7 5 5 6

故鳥水翁紀念像落成

鳥水翁歿後、小島家から本會に寄贈された資金で、なにか永くあとまで残るものを作りたとい考へた擧句、故人が最後まで深い關心を寄せてゐられた圖書室に、故人の紀念像をといふことに相談がまとまり、嘗てウエストン像を手がけた會員佐藤久一朗氏に、その制作を依頼したのは今年の一月であつた。

文藝に美術に登山に夫々一家をなした故翁の奥深く幅広い性格を一面の浮彫像に具現したいといふので、制作者の苦心は一通りのものでなかつたが、約半歳にして見事に出来上り、去る六月十日圖書室南面の外壁に掲げられる運びとなつた。

この日生憎の雨で、故人に最も



親しい老先輩連の顔が見えなかつたのは物足りなかつたが、三十餘人の有志集り、レリーフに花を飾つて、故人を偲んだのである。吾々としていちはん残念なのは、小さいながらも氣分のよい圖書室が完成し、内外の山岳書が不充分とはいへ、書棚に入つた昨今のクラブルームに、小島さんを迎へて、大いに喜んで貰へなかつたことだし、しかしこの浮彫像が、圖書室のテラスで、いつになつても渝らぬ山岳放談にふける吾々を、壁間からちつと眺めてゐられるのを思ふと心強い氣もするのである。

終はりに、小島家の御厚意と制作者佐藤氏の苦心とに、深い謝意を表する。(T・F)

(寫眞はそのレリーフ)

第四回ウエストン祭

今年のウエストン祭は會報前號にも豫告された通り七月九日神河内に於て催された。今回から信濃支部が總力を擧げて準備に奔走された甲斐あつて、バス宿舍の割引並びにその連絡待遇等遺憾なく來會百餘名の會員は満足的面持であつた。折悪く晝頃迄仰き見られた穂高の雄姿も催しをはじめる頃は雨の中にかき消され、碑前祭は僅かに役員數名が降りしきる雨の中でレリーフの前に心からの草花を捧げたのみで割愛の止むなきに至り三時半から白樺食堂で豫定の講演會を開いた。松本支部委員の司會で谷口理事の挨拶に續き、松方理事長不參のため藤本九三氏「ウエストン祭偶感」次いで小林國夫氏の「日本アルプス地學の新問題」と尾崎喜八氏の「登山者の詩精神」の三講演があり、夜間は雨の晴れ間に梓河原でキャンブファイヤーが行はれた。翌十日は幸ひ好轉した天氣に豫定通り講習會、縦走等が行を起した。

今回は藤本・西岡・日高・大澤・佐野・三井等會員諸氏をはじめ役員では石原・谷口・藤井・望月・村山・山田等が參加し、山梨・静岡、山陰、東北などからも熱心な會員がみえたが東京の常連は役員以外には織内氏位で前回迄に比し稍と淋しかつた。信濃支部の献身的な準備に深い感謝を捧げると同時に地元旅館、電鐵等の協力にも感謝したい。ウエストン祭も年を追つて公的の性格を帯びてきたので次回は更にこの點を考慮してより良い催しを持ちたいと思ひて深

めたことであつた。

尙今回試みられた假松の實を模した參加章はこの種催しには相應しいもので、見ず知らずの人同志でもあのバッヂをつけてゐたことから、お互ひにこの催しに參加してゐることを意識しあへて特に親しみを覺えたことであつた。一見無意味のやうに思へて案外意味の深いものだつたと思ふ。(T・M)

夏山講習會報告

七月十日・十四日 於穂高岳潤澤 參加者、リーダー、谷口、山田、村木、秀島、坂本、松澤、松田、細田、金澤、講習員石塚、佐藤、岡田、小泉、深田、金澤、松井、林原(以上山陰支部) 渡邊(關西支部) 沖、玉川、楡置(以上廣島支部) 村上(山形支部) 鈴木、安澤、高島、玉置、田中(以上東京支部)

午後は必ず軽い夕立に見舞れたが、連日好天氣に恵れて短期間の日程を極めて有効に終始出来た。村木、山田、秀島の若い學校O・Bの三君に、現役學生の坂本君以下を配した三ヶ班を作り、班員も三日間變更せず行動した。そしてその日一番楽な行程を歩く班が炊事班となり、五時起床、七時朝食を確實に實行した。歩いたところは北穂高東尾根經由北穂高→奥穂、ジャンダルム往復(一ヶ班は奥穂直登ルンゼ經由他の班は前、奥最低鞍部經由)前穂高北尾根→奥穂、等を交替で歩いた。岩登りの上達の爲には特に難しいところを歩くと云ふより、中等度の岩場を適確な技術で快的に歩く方が將來の爲に好いと云ふ私の持論に各リーダーが賛同し、

右の様な行程が定められたわけである。瀧谷とか、どこかやらの壁をリーダーに引きづり上げられることを期待して居た一部の講習員も講習の終る迄には私達の意のあるところを諒解した様である。

グリセードは一寸身を入れてやつた。實を云ふと潤澤で見かける他の登山者のグリセードが餘りひどいので吐が立つて、他のことはともかくグリセードだけは一人前にして歸そうと考へたわけなのである。そして大體その目的を達したと云へるだらう。特に今年は潤澤は雪も多く、グリセードの練習には適して居たからでもあるが三、四時間もみっちり練習すればともかく實用的には充分安心の出来る技術が習得出来るのにグリセードがあんなに下手なのはどんな人達なのだらうか。眞剣に山登りをやる氣がない人達と云はざるを得ない。

何も面倒くさいことは云はなかつたが、若い學生の補助リーダー諸君が他の學校の先輩に對しても少しも論ることなく極めて立派なメンバーシップを示し、卒先して講習員の間にも規律を作つてくれたので、おのづから出来上つた雰囲気はまことに好ましいものだらう。講習員も眞實目でも熱心な人が多く炊事班の日など誰彼の區別なく氣持ちよく働いてくれた。技術的な面はともかくとして、河童橋の袂で始めて顔を合した者達が、あの襟に愉快にのびやかに、而も立派な規律を保つて生活し得たことは私として欲びに耐えない。會としても終戦後行つて來た幾多の行事には嘗てなかつた一つの意義を果したのではなからうか。自畫自讃

に過ぎたかも知れないが、行く迄は又してもとんだお役目を仰せつかつた自らを嘆じて居た私なのだが、山を下降つた日には何か好い山登りをして歸る日の様に心愉しかつた。戦後の日本の登山界にも肚の立つこと許りがあるわけではない。阿々。

猶、末筆だが、此の講習會は、經費の點で一度は流産しかけたのだが、毎日新聞の理解ある後援を得て、實行に移すことが出来たのである。新聞社がはでなりウエストン祭の爲にはなく特にそれに引き續く、地味な講習會の爲に後援を買つて出られたと云ふことは、色々な意味で大變意義深いことであつたと思ふ。一言毎日新聞に謝意を表したいと思ふ。(谷口現吉記)

荻野音松さんのこと

小野 幸

昭和十三年の五月であつた。奥秩父の黒金山から西澤に降りて、その頃盛んに掘出していた三富嶺山小屋に泊めてもらつたことがあつた。この小屋は西澤を歩くたびに泊めてもらつた小屋で徳久さんという東大出の技師が鑛山主で、この小屋におられエトランゼとしての私をいつもなつかしがつてくれた。この時も二三泊させてもらった。この五月下旬の頃が京の澤の櫻の満開で湯から出て西澤をぶらついた歸り、小屋の別棟の物置小屋の戸が開いていたので何の氣もなくその戸をしめようとしたら、その戸板の裏側にかすかながら筆で書かれた「山岳會員」云々の文

穂高・槍縦走班

七月十日午前八時河童橋白樺莊前に集合、五七歳の石原先生を最年長者とし一行十八名は晴天に胸を躍らせながら岳川へと出發した。村山氏がリーダーの手不足を補ふため奥穂高同行して下さる。前穂は頂上を割愛し最低鞍部へと出る。この頃より霧が湧き出し、北尾根の雪溪が霧の中に陰翳する。何時もながら釣尾根よりの北尾根の雪溪は急峻に見える。

四時穂高小屋に到着、小屋下の雪溪でグリセードを練習する。村山・黒川氏は潤澤へ下る。夜、座談會を開く。翌十一日、潤澤へ下の石原・飯塚氏を見送りキレット迄サポートして下さる明葉OB小田部氏を潤澤より迎へ、八時半出發、展望を樂みながら北穂・キレ

字が見られたので近よつて見ると明治三十九年八月

東京市日本橋

山岳會員、荻野音松

此處(以下不明)

案内人、日原(以下不明)

思いがけぬ所で日本山岳會の先輩の名を見つけて何とも云えぬ氣になつた。この板はこの小屋からすぐ下手の京ノ澤小屋(大岳山の籠堂)の廢家になつたものの木片を利用した開き戸であつた。徳久さんに話して戴いて日本山岳會に持つて行くかとも考へたが、この戸も何時かこわれてくれればその時に事情を話してもらおうと考へていたら、それから五六年して、こわされてしまつた。

荻野さんがこの京ノ澤小屋に泊られた八月二十四日は嵐の日で、

ツトと悪場を越へ、中岳の牧歌的な尾根を昔からの山友達の如く和氣満々と行き槍肩小屋に泊る。翌十二日、烏帽子に縦走する吳羽筋の五人の方とわかれ、槍澤を下る雪は多く、槍澤小屋の近くまで雪溪が続いてゐた。途中驟雨に會ふ。三時に上高地にて解散する。

リーダー 百瀬寛一、雨宮淳三、大木保太郎
参加者 地主素明、松浦謙助、西尾治郎、多田慶敏、池上信二、伊藤恭二、石原憲治、飯塚浩、黒川秋三、松本郁子、吉村貴一、松本上、久保田清、奥原晴子、白井裕子
尙右の外に槍燕班(リーダー)林利春、小里頼忠があり十日殺生泊、十一日中房泊で豫定とは多少變更があつたが行事を終つたことを附記する。(大木保太郎記)

「雨洩りのせぬ一隅を選び床上に着莫座を敷き毛布にくるまり」ながら一夜をすこし、翌日は國師岳に登られそれより尾根ぞいに金峰山に縦走されている。この人については鳥水氏が昭和七年に「悪澤岳の發見者」として紹介されてお

り、それによれば荻野さんは三倍の會費をはらう特別會員で、日本橋本銀町に住まれる燒芋屋さんで明治四十一年七月二十八日急性腦膜炎、二十七歳で他界された事などが知られる。その荻野さんの落書のことをも暮先生に話した時は「荻野という男は氣狂いだつたらしいね」と言われただけであつたとにかく私がこの戸板の一片を虎ノ門の山岳會に持つて来たとしても、あの火災に失われていた筈である。(五〇・五・一四)

持つて軽るく
張つて楽しい
細野のテント

「東京高等學校山岳連盟」御用
東京都千代田區神田須田町二ノ二三
細野博吉商店
電話茅場町六二四二

『高山深谷』發刊に際し 山岳寫眞懸賞募集

『高山深谷』は本會が一九一〇年六月にその第一輯を刊行した山岳寫眞集で、爾後不定期に刊行されたが、最後の第十輯は一九四一年十二月に上梓され、その後約十年間刊行を見なかつた。今回書肆目黒書店の好意により第十一輯を廣く山岳愛好の士に贈り得ることは本會の深く喜びとするところである。殊に優れた山岳寫眞を會員はもとより一般岳人から募るため懸賞募集に致したいと云ふ目黒書店の意圖を全面的に受入れた次第であるから、左記規定に従ひ多くの傑作秀作を寄せられんことを期待する。
一九五〇年八月

募集規定 日本山岳會

- 一、題材 山岳を主にするも山岳に關係ある高原・山林・部落・動植物・人物等自由で、必ずしも未發表のものに限らない。(撮影年月日、場所、撮影條件、題名等明記のこと)
- 二、寸法 八ツ切乃至四ツ切で一人五點以内。
- 三、締切期日 昭和二十五年十一月末日
- 四、發表表 日本十二月發行日本山岳會報誌上。
- 五、發表方法 日本山岳會編『高山深谷』第十一輯(目黒書店發行)に集録。
- 六、賞金 一等 貳萬圓(一名)
二等 參千圓(二名)
三等 壹千圓(三名)
- 七、選者 尙當選者全部に「高山深谷」一冊。
日本山岳會
- 八、掲載寫眞の出版權は目黒書店に歸屬し、選者は著作権に關する責任を持つ。
- 九、應募寫眞は東京都千代田區神田駿河臺四の六 日本山岳會内「高山深谷」編集係宛に送らるべき。
- 九、選考委員及び編集委員は日本山岳會常務役員會に於て決定する。選考に關する問合せには一切應じない。以上



圖書紹介

Himalayan Journal
Vol. XV 1949. 122pp.

今年の春頃連絡が恢復したヒマ
ラヤンクラブから最近一九四九年
のジャーナル十五號が到着した。
思へば會報九九號に一九四〇年・
十二號の紹介を書いたのでから長い
月がたつた。一九四一年・十三號
以來一九四八年に十四號を出す迄
七年の空白があつたことを知る。
今號は戦後の第二回目、十四號
はまだ本會には届いてゐない。内
容を概観するとまづティルマンの
二つの寄稿が目を惹く。一つは、
「新疆省の山」と題してボグド・
オラとチャクラギル山群の紀行で
他はムズターグ・アータの登攀、
(一九四七年八月)を敘したのも
共に舊友シプトン(當時カシユガ
ールの英國總領事)と同行したも
のである。ムズターグ・アータで
は絶頂圏内に近づき乍ら「六月初
旬の頂上レストのノース・コル
でも經驗されなれ酷寒」のため退
却した。次に一九四七年に行はれ
た瑞西隊のガルワール遠征がアン
ドレ・ロッシュ等四人によつて分
擔執筆されてゐる。この時ケダル

ナート、サトバント、ナンダ・グ
ンティ等が登頂され、ガルワール
の登山史に新たなものをつけ加へ
てゐる。特殊な面白味の感ぜられ
るのはバイダーン寄稿の一文で、
彼と同僚シユマラヤの歸途獨
英開戦のため印度で抑留され、爾
來山間の收容所を轉々とする中一
九四五年脱出を試み、西藏印度國
境のヒマラヤ山中を彷徨する中シ
ユマラヤは遂に土民に殺害され、
バイダーンだけ独り淋しく歸還
した物語で、曾てシニオルチュ
ヤナガ・バルバートヤテント・
ビークで果敢な登攀振りを示した
僚友の最期をバイダーンは友情に
みちた筆致で述べてゐる。他にフ
ランクが一九三九年のナンダ・
コート登攀記を寄せゐるが頂上
に達したものでない。
追悼欄にはラットレヂが三頁に
亘つてスマイスのことを書いてゐ
る。

最後に今號には編輯者としてト
ビン氏の名が記されてゐるが創刊
以來卓越した編輯振りを發揮して
本誌の聲價を高めるに寄與したケ
ニス・メイスン教授の名がどこに
も見えないのは、古くから本誌に
親しむ者には一抹の寂しさを與へな
いではをかない。紙面の都合で甚
だ粗雑な紹介に終つたが、内容の
詳細は何れ「山岳」誌上にも取
り上げてみたい。免もあれ戦後初
めて船載されたジャーナルとして
のみならず、讀みごたえある内容
と貴重な寫眞を収めた本誌は、長
い間の飢渴を癒すに十分である。
ヒマラヤの舞臺に数々の遠征隊が
派遣された戦前には立派な會誌を
出すことはむしろ比較的容易であ

つたらうが、戦後の困難な時代に
も尙瞻目に足る編輯振りを示し得
るのは何にもましてこの會の基礎
の堅いのを物語るものであらう。

(T・M)

Mountaineers Handbook
The Techniques of
Mountain Climbing—com-
piled by The Mountaineers,
Incorporated, Seattle 1948.

アルバータの記念ビッケルを會
へ贈られた在ポートランドのエイ
ヤース氏が、この程シャトルのマ
ウンテニヤース山岳會のメンバー
によつて編集された掲題の書物を
寄贈された。同會は一九〇六年の
創設にかゝり現在米國太平洋岸で
の最も活躍してゐる山岳會だけあ
つて、丁度「山日記」の本文に似
通つたこの手帳も中々要領よく出
用上つてゐる。主たる内容は、一
章露營技術とビグアク、四章食糧
と野外調理、五章コンパス地圖及
方位測定、六章地圖の裏打ちと地
圖入れ、七章遭難時の注意、八章
ルート發見法、九章岩登、十章ロ
ープ技術、十一章信號、十二章ピ
ーン技術、十三章雪の知識、十四
章雪上技術、十五章水上技術、十
六章雪崩、十七章急救處置、十八
章急救用具、十九章遭難救助、二
十章隊の編成と運營、附録、登山
用語、と極めて多方面に亘つてを
りこれだけを圖面一七頁を含めて
僅か一六〇頁に集約してゐる點は
多くの熟練者の手によつて、十餘年
の歳月版を重ねてきたことを物語
るものであらう。従つて各章を充
たす細目は數行宛で極めて要旨的
であり、又主として初歩の登山者

を
目指したものである。最近わ
が國でもとくに新制高校山岳部や
大學の正課用のテキストとして良
い登山技術書の要望が高いと聞く
が、そうしたものを作るに一應參
考となるであらう。(T・M)

山岳・富山 第二號

富山支部の部誌第二號が六月に
發行された。A5版六〇頁、寫眞
二葉。印刷もきれいで中々すつき
りした編集振りにある。貴堂武時
「富山の登山と觀光について」の二
つの希望「沼倉寛二郎」「小アナ
ラ谷より雪洞による毛勝猫又へ」
と「早大山岳部劍登攀隊員を圍む
懇談會」が主なるもの。寫眞の一
葉は早大撮影の赤谷尾根から見た
劍岳北面の景で、力強い感じをよ
く捕えたものだが、惜しむらくは
印刷がもう一步と云ふところ。

信濃支部報 第五號

每號充實した内容を収めてゐる
が七月發行の五號は、尾崎喜八「開
かざりし花」松方三郎「ウエスト
ン翁の一面」山崎林治「ケシヨウ
ヤナギの話」が主なる内容であ
る。B5版四頁。

東京支部報 第四號

昨年末第一號を發刊以來號を重
ね、八月には第四號を出した。杉
本義信「一般團體部門の發足にあ
たりて」の他は行事會務報告が主
である。B5版四頁。

圖書室よりの報告

圖書室もだん／＼と銷がつかつて
新築らしい気分はなくなつた。
それだけに吾々の親しみは深くな
つてきたのは喜ばしいことだが、
内部の書物は、例へば各學校山岳
部々報や、歴史のふるい登山團體
の會報など、創刊號から揃つてゐ
るのは稀だといふやうな譯で、ま

だ、圖書基金其他會員諸兄の支
援助力を俟つことは妙くないので
あるが、どうも圖書室は出来上つ
たんだから、もう何もする必要は
ないのだから、薄らいだ人々が少く
ないのではあるまいか。

圖書室報告にいつも書いてゐる

やうに、これは一部少数會員の占
有物でなく、全會員の共有物、共
有財産なのだから、どうかその積
りてまだ未完成のものとして、こ
の完成に力をかして戴きたいと思
ふ。(T・F)

寄附者芳名

- 一千圓 増田繁雄(第二回) 五
- 二百二十圓 大島重信 三百圓 三
- 鷹山想會
- 小計 一八二〇圓
- 累計一九六七〇圓

仙境逆卷の湯

新潟縣中魚沼郡
秋成村逆卷
湯元川津屋旅館
吉野正夫

附近主要山岳溪谷
苗場・岩菅・オズノ
(鳥甲)・佐武流・白
砂・魚ノ川・雜魚川
・檜又川・硫黃川・
清津川・釜川

交通 上越線石打驛
より廿軒、飯山線越
後外丸驛より十六軒
宿泊料 自炊五〇圓
百圓、山岳會員は特別
優遇、山岳會員は特別
〇〇圓(何人様でも)

新緑・紅葉・避暑・登山・溪流釣・狩獵

小集會記錄

第一一八回 二月十六日
映畫 十六ミリ天然色

會員 塚本 閣 治氏
日光紅葉譜・秋の上高地・美ヶ原の三種映寫。いつもながらの絢爛たるフィルムに加へ塚本氏自身の行きとゞいた説明に、來會者約七十名、狭いルームは身動きもできない盛況で愉快な夕であつた。

第一一九回 三月十六日
映畫 十六ミリ黒部溪谷 三巻

會員 別宮 貞 俊氏
大正初期から數回に亘る克明な踏査の記録として黒部の深さと大きさを隅から隅まで描寫しつくして餘す所もなく、永く傳えられるべき貴重な作品である。誰もがいつでも行ける所でないだけに、今後この種の映畫の撮影の困難さもあることながら、部分的には見ることさえ永久に不可能なことになるかもしれない。來會者六十名、非常な興味を以て觀賞した。

第一二〇回 四月廿日
講演 黒部と黒蘆川

會員 冠 松次郎氏
古くからの會員であり、黒部の第一人者である冠氏は、まず本邦の代表的風景の、近年に於ける自然的荒廢と人為的破壊の概況を一々實例により説明され、ついで黒部に就いて水源山脈より説き、本流支流を問わず、正に縦横無盡に話された。天候悪く來會者 卅名、いさゝか淋しかったが、若々しくさえ見える氏の熱意に一同時のたつのも忘れて聴き入つた。

第一二一回 五月十八日
講演 木暮理太郎氏を偲ぶ

名譽會員 田部重治氏
評議員 藤島敏男氏
前會長木暮氏を語るには、會員中その人に乏しくはないが、同夜の講師は洵にその人を得たものといふべく、藤島氏は木暮氏を語るに先輩というよりもむしろ師の禮を以てされ、何かしらほろ／＼と心温る思いであつた。田部氏は木暮氏との登山交游の初期時代より語り、輕妙洒脱の談話の中に長年の交りと幾多の登山の思出を述べられた。

當夜の來會者は木暮氏を知ると知らざるにと拘わらず、すぐれた登山者としての木暮氏の人格に打たれ、兩氏の交游に美しさを感じたであらう。

第一二二回 六月十五日
幻燈 ナンダコート

解説 理事 堀田彌一氏
ナンダコート初登頂の貴重な記録であるスライド百二十餘枚に、解説は當時の遠征隊長堀田氏の詳細を極めたもので、實に二時間を費やした。すでに明るい内から室暑さにもめげず熱心に觀賞し解説に耳を傾けた。

第一二三回 七月廿日
獨唱 山の歌

朝倉 章 子嬢
朝倉嬢の獨唱につづいて講演に入つたが、本邦最初の登山用具商

としてまた登山界の先輩として永い體驗を通して語られた西岡氏の話など微に入り細をうがち、そのまゝ本邦近代登山の一面史でもあり、まことに興味津々たるものであつた。

村木氏は數種類のピッケルを試験した結果よりの學究的隨想ともいふべき話、藤島氏はピッケルに絡まる交友など人情的な話、三氏それ／＼の角度から語られて來會者に感銘を與えた。

終つて芝生へで、川森夫人配慮の洋菓子とココロラで三々伍々歡談し、テラスへ立つた朝倉嬢から山の歌の指導を受けた。

會務報告

- 五月 逆絡理事會(十七日)
- 月例役員會(廿四日)
- 主なる事項、第四回ウェストン祭及それに續く潤澤講習會、縦走班のこと、本年度國體終了後に於る静岡支部主催の富士山講習會、第六回七回國體、鳥水翁レリーフ設置のこと、六月二十八日の静岡支部總會に際し藤島評議員及谷口理事出張のこと
- 六月 逆絡理事會(七月十四日)
- 月例役員會(廿一日)
- 主なる事項、團體加入會員遭難時の對策、第五回國體、ウェストン祭、山小屋割引のこと、六月二十五日山梨支部總會に際し田部・横兩名譽會員及谷口理事出張のこと、本年度山日記の方針、關根理事主管となり遭難調査委員會設置のこと、「高山深谷」第十一輯刊行のこと、山日記及山岳、會員割引の山小屋のこと、テラス修理
- 七月 逆絡理事會(五月十九日)

好日山莊

登山とスキー用具
日本最古の専門店

東京店
東京都中央区銀座西二ノ五
(電話 京橋 3600)
海野治良

大阪店
大阪市北區堂ビル前
協和ビル三階
西岡一雄

月例役員會(廿六日)
主なる事項、ウェストン祭細目決定、同殘務整理、指定山小屋への發送文書の檢討、支部新設及廢止等のこと、オリンピック委員派遣負擔金支出のこと、體協内浴場新設分擔金支出のこと、支部問題、第五回國體派遣本部役員六名と決定、木暮高頭兩氏レリーフのこと第六回國體は廣島と決定せるも第七回については山形(鳥海山)と内定。

★高頭仁兵衛翁壽像建設 越後支部で企てた壽像建設は五月廿日彌彦神社に除幕式、七日日彌彦山頂の基石に翁のレリーフ武田會長の銘板を填込んで完成した。然し釀金は成績悪く約三萬圓の不足となつてゐる由ですから會員各位の御援助を期待します。

★六月廿九日から三日間ルームで夏山講習會(講師村木・加藤・大塚・辰沼・杉本)を開き好評を博した。

會員訃報

中村貞治君(昭和七年四月入會... 渡部正三君(昭和廿三年九月入會... 小川登喜男君(昭和六年九月入會... 風岩等に記録的な登攀を行つた。

(山岳二六年三號参照) 本會は右三君の靈に對し謹みて哀悼の意を表する。

今號には附録として一〇一—一五〇號の總目錄を附けました。整本御希望の方に事務所宛御申越下されば費用等御通知します。總目錄第一頁上段終行の「痛々しい」は「痛ましい」に訂正します。

魚沼三山・銀山平・尾瀬が原の關門 大湯温泉 東榮館

上越線小出駅下車バス40分 宿泊料2食付350圓 日本山岳會員及びその紹介の方2割引

昭和廿五年九月十日 發行 東京都千代田區 神田駿河臺四ノ六

電話 二〇八八番 日本體育協會 編集者 望月達夫

印刷所 株式會社 技報堂

山と溪谷社版(1951年度)アルパインカレンダー

目下鋭意準備中 (一般岳人よりの作品も募集します。キヤビネ、裏面に主題住所氏名明記、點數自由、採否は御一任のこと、切10月25日)

山と溪谷 136號 (九月號) 發賣中 興味浸々たる「山獸綺譚」特集

- 原色版表紙 千岩魚... 加藤水城 繪 谷川岳一の倉本谷... 風見武秀 谷川岳より朝の靉岳... 中野俊郎 威風山より仙丈岳... 池田光一郎 奥白根の岩場... 石川輝之 志賀高原の地形について... 佐藤久 奥秩父の秋... 柿原謙一 故里から見た上信越の山々... 町田嘉章 ★北海道の羅狩り... 西村武重 ★鈴羊生捕り記... 若林啓之助 ★(クラフイック)熊の共喰い... 安齊徹 ★せん澤の猿... (マタギ)大塚音作 ★雷鳥雜話... 長尾宏也 ★箱根山の女金太郎... 冠松次郎 ★谷川岳登山案内... 冠松次郎 六角川岳登山案内... 冠松次郎 地圖の読み方第三課... 籠瀬良平 岩登技術第三講「ハーケン技術」伊藤洋平 (岩場めぐり)前穂高屏風岩... 石岡敏雄 阿蘇北尾根遭難難書... 月原俊二 その他海外登山界ニュース、登山地情報、登山界ニュース、岳人辭典、岳人往來、新刊紹介、山岳會消息、讀者寄語、山溪俱樂部レポート、登山質問室、執筆家通信、火山脈等滿載

日本の山々 塚本閔治著

二十周年記念出版 戦後最高を誇る山岳写真集に田部、武田、冠、横、松方、村井、黒田、藤木、中西、猪谷の諸權威の隨想を附す。目下好評發賣中、価八〇〇円書留送料六五円

東京都中央区銀座五丁目八番

株式會社

山と溪谷社

電話(銀座) 6473番 振替(東京) 60249番